

「井手の里を巡る」

井守徳弘

●予定コース:

学研登美ヶ丘駅—JR祝園駅—JR木津駅—JR玉水駅—山吹の碑—
蛙塚の碑—井堤寺跡—文化財展示室—玉津岡神社—地蔵禅院(昼食)—
小町塚—町づくりセンター—石橋瓦窯跡—橘諸兄供養塔—井手火山灰層—
六角井戸—玉川—JR玉水駅—JR木津駅—JR祝園駅—学研登美ヶ丘駅(解散)
(約5.5km)



●山吹の碑

華道の未生流には「井出の玉川」という”景色挿け”があります。玉川の水に映して咲く山吹の美しさを生け花としてとらえ、玉川の水の流れを黒白の砂利で表現するといひます。

また、藤原俊成が新古今集で詠んだという歌が有名です。

「駒とめて なほ水かはん 山吹の 花の露そふ 井手の玉川」

奈良時代の聖武天皇に仕えて第一の権臣だった左大臣・橘諸兄は、ここを本拠としており井出の左大臣と呼ばれていました。その諸兄が、氏寺の井堤寺(いでじ)をつくり、寺の庭だけでなく玉川の堤にも山吹を植えた。そのため、「井手の玉川」は山吹の名所となり、いつしか山吹は井手の枕詞となり、たくさんの歌に詠まれました。この玉川は天井川で、川の下をJRが通っています。

しかし、昭和28年(1953)の南山城水害で、堤防が決壊し山吹は壊滅的な打撃

を受けましたが、その後両岸に桜が植樹され、毎年春には桜が咲き乱れ、現在では「井手町さくらまつり」が開催されるなど、桜の名所として賑わいを見せています。

玉川の土手に「井提茶蘼故址」の碑が建っている。

「蘼」だが「び」と読みます。「茶蘼」は中国は宋(960～1279)の時代に張敏叔が名花十二種を選び人に擬して命名した、

牡丹(貴客)、梅(清客)、菊(寿客)、瑞香(佳客)、丁香(素客)、蘭(幽客)、蓮(静客)、茶蘼(雅客)、桂花(仙客)、薔薇(野客)、茉莉(遠客)、芍薬(近客)での一つで、茶蘼(雅客)は風雅を理解し愛好する人。風流人という意味があります。

横に「後醍醐天皇舊蹟」是より東一里(約4km)があり、これは東にある有王山の麓にも、碑が立っており、『太平記』(南北朝時代の軍記物語)の中で醍醐天皇が笠置落ちの後、捕われた場所の伝承地があります。

「茶蘼」(雅客)は蔓性の灌木で香り高い白い花をつけ、後醍醐天皇が香り高い「雅」ということなのでしょう。

●蛙塚の碑

玉川の清らかな流れと黄金色のやまぶきの花の彩りなど、詩情豊かな井手の里は、万葉の昔より平安・鎌倉・江戸と、時代を紡いで数々の和歌に詠まれてきました。なかでも美しい歌声を聴かせる蛙(かわず)は井手の枕詞として用いられる程、数多く詠まれています。

このあたりは玉の井と呼ばれるように、湧水がこんこんと湧き出ておりました。その昔、大和路を行き交う人々は、湧き出でる清水で喉の渇きを潤すとともに、水辺に遊ぶ蛙の声で旅の疲れを癒したことと思われまします。(案内板より)

○山吹・井手・蛙を詠んだ主な和歌・俳句

◎山吹の 花の盛りに かくのごと 君を見まは 千年(ちとせ)にもがも

『万葉集』4304 大伴家持

◎蛙(かわず)鳴く 井出の山吹 散りにけり 花の盛りに あはましものを

『古今集』詠み人知らず

◎春ふかみ 井手の川波 たちかへり 見てこそゆかめ 山吹の花

『拾遺集』(天曆御時歌合に) 源順(したごう)

◎春くるる 井手のしがらみ せきかねて 行く瀬にうつる 山吹のはな

『続後撰集』(題しらず) 藤原信実(のぶざね)

◎玉もかる 井手のしがらみ 春かけて 咲くや川瀬の やまぶきの花

『新勅撰集』(款冬をよめる) 源実朝

◎色も香も なつかしきかな 蛙(かはづ)なく むでのわたりの 山吹の花

『新後拾遺集』小野小町

◎あしびきの 山吹の花 散りにけり 井手のかはづは 今や鳴くらむ

『新古今集』藤原興風(おきかぜ)

◎山吹の 花咲きにけり かはづ鳴く 井手の里人 いまやとはまし

『千載集』藤原基俊(もとし)

◎山しろの 井手の玉川 水清み さやにうつろふ 山吹のはな

『天降言(あまりごと)』(山吹) 田安宗武

◎山吹や 井手を流るる 鮑屑(かんなくず)

『几董初懐紙(きとうはつがいし)』 蕪村

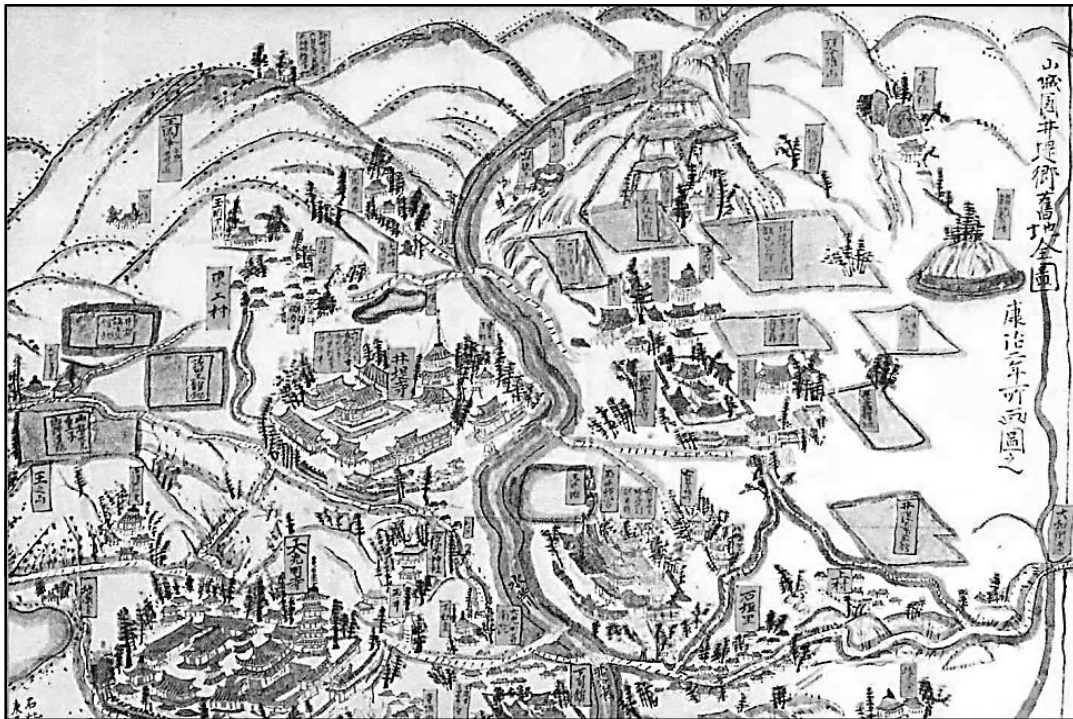
●井堤寺跡

井堤寺は、円堤寺(井手寺)とも称され、天平時代の左大臣・橘諸兄公が、母三千代の一周忌にちなみ創建した氏寺と伝えられています。

造営の折に諸兄公は、金堂の四面に山吹を植え、黄金色の山吹が水に映える風情を楽しめるよう工夫されたとの事です。現在は偲ぶようすもありませんが、付近一帯は、通称名として「薬師堂」、「ドウノウエ」などの地名が残されており、奈良時代の井堤寺は、七堂伽藍の壮大な威容を誇っていたと考えられます。

この他井堤寺には、小野小町が出家して当寺で余生を過ごしたことなど、小町ゆかりの伝説も伝わっています。

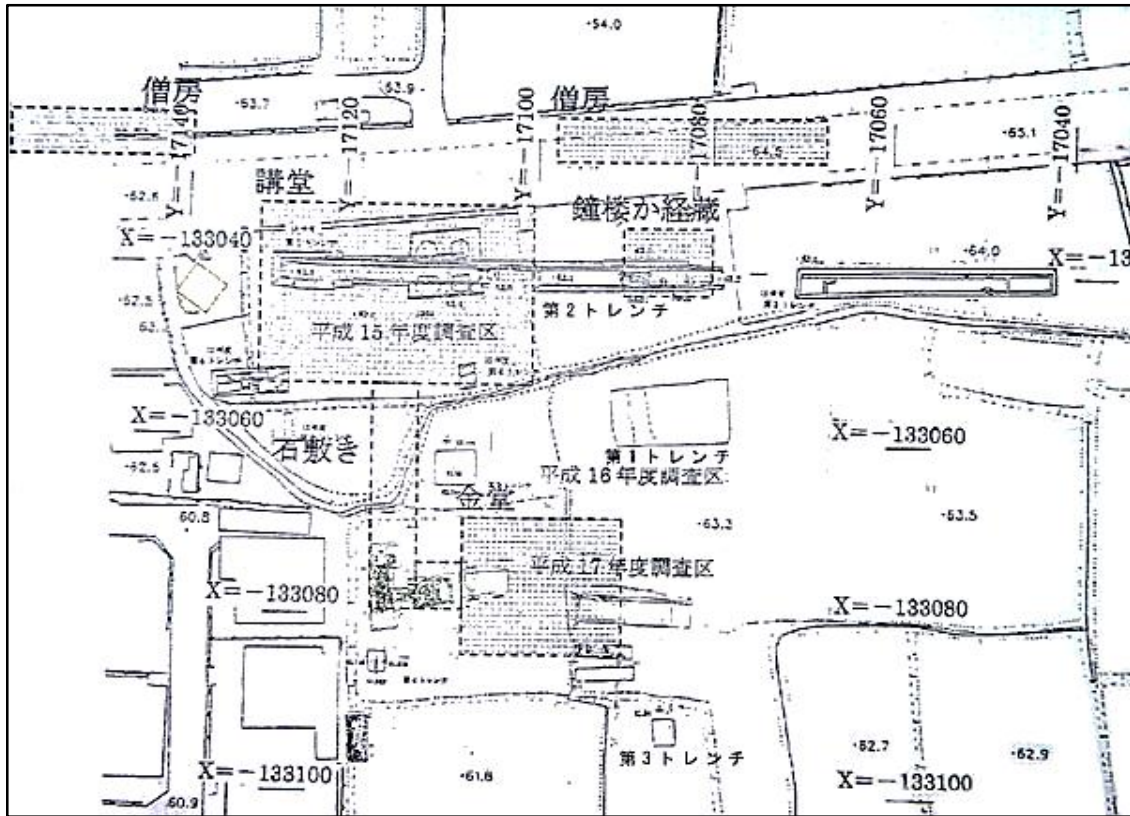
○康治2年(1143)に描かれた井堤郷の旧地部分



井堤寺の
部分拡大

「井手町の古代・中世・近世」井手町史編集委員会、1982 より

○井手町教育委員会現地説明会資料より



●文化財展示室

平成20年(2008)に文化財の小さな展示室(資料館的)が開設されました。1階(約65㎡)で井手町内遺跡出土遺物が展示されています。主なものは、平山古墳の出土陶棺や須恵器副葬品、鉄鏃。石橋瓦窯跡の大安寺創建期軒丸瓦、軒平瓦。井堤寺跡の施釉線刻垂木先瓦、軒丸・軒平瓦等が展示されています。2階(約25㎡)は古文書と民俗資料展示されています。



平山古墳の出土陶棺



井堤寺跡の出土石畳

●玉津岡神社

祭神は六柱神です。

下照比売命(しものてるひめのみこと)
天兒屋根命(あめのこやねのみこと)
少彦名命(すくなひこなのみこと)
素戔嗚命(すさのおのみこと)
味耜高彥根命(あじすきたかひこねのみこと)
菅原道真公

創建は社伝によると、欽明天皇元年(541)祭神の下照比賣命が玉津岡に降臨された。そこに宮社を建ててお祭りしたのが「玉津岡の社」であり、玉津岡神社のはじまりである。

その後、天平3年(西暦731年)9月に、井堤左大臣橘諸兄公は、橘一族の氏神として、椋本天神社を創祀した。

「玉岡の社」は、「玉岡春日社」、江戸時代には「八王子社」と称号を変え、現在の玉津岡神社となる。

明治11年10月5日、八王子社、春日社、田中社、八坂社、天神社の5社を八王子社殿(玉岡の社)に合祭した。

明治12年5月27日、村社となり、明治14年7月8日、社号を「玉津岡神社」と改称し、明治15年4月24日、郷社となった。明治23年4月14日、有王天満宮を合祀されました。

本殿は江戸時代前期の貞享4年(1687)の造営で京都府登録文化財です。

拝殿にはコウモリ・鶴・亀・蛙・兎などが彫られています。

絵馬堂には米寿祝いの手形も奉納されています。

●地蔵禅院(昼食)

曹洞宗地蔵院は、明治16年(1883)の綴喜郡寺院明細帳によると、創立は不詳としながらも、「もと南都東大寺華嚴宗の旧趾也」とし、寛永5年(1628)に、関東天王院至心孝察和尚が、同じく千葉県東長寺物外麟應和尚を、当院の開祖として勧請し、禅宗(曹洞宗)に改められたことが記されている。

また貞享元年(1614)の雍州府志(江戸時代に刊行された山城国に関する最初の総合的地誌。著者は黒川道祐)によると、本尊地蔵菩薩は、井手左大臣橘諸兄公の持仏であったと伝えられている。

現在のシダレザクラは、享保12年(1727)に植樹された。昭和22年(1947)に枯死した円山公園の初代シダレザクラは、当院の先代の親桜から株分けしたもので、母樹を同じくする古木である。幹周2m40cm余、樹高10m、地上約1mの部分で南へ支幹が分岐し、さらに、主幹は二分して東側の一支幹はほぼ水平に南方へのびだしている。京都百景にふさわしく、木津川の流れを遠望出来る景勝の地であり、小鳥のさえずるなかで、遠くには、生駒、信貴、葛城、金剛の連峰を望むことが出来る。京都府指定天然記念物である。

●小町塚

小野小町終焉の地は諸説ありますが、『山城名勝志』宝永2年(1705)には、「或書云、冷泉家記云、小野小町六十九歳於井手寺死」などと記されている。また、「百人一首抄」(室町時代)に「小野小町のおはりける所は山城の井手の里なりとなん」とあるので、信憑性は高いものと思われます。

最初に取り上げた「井手・蛙・山吹」にも『新後拾遺集』小野小町の和歌があります。

色も香も なつかしきかな 蛙(かはづ)なく むでのわたりの 山吹の花

小野 小町は、平安前期9世紀頃の女流歌人。六歌仙、三十六歌仙、女房三十六歌仙の一人。

絶世の美女として七小町など数々の逸話があり、後世に能や浄瑠璃などの題材としても使われている。

『古今集』で百人一首にもあり有名歌です。

花の色は うつりにけりな いたづらに わが身世にふる ながめせしまに

●町づくりセンター椿坂

井手の椿坂には恋物語「井手の下帯」の伝承が残ります。

平安時代中期につくられたとされる「大和物語」に、この伝承にまつわる説話が収められている。

ある時、都から大和の国へ向かっていた内舎人(うどねり)の男が井手の里を通りがかった。すると、道沿いの屋敷から、とても愛らしい顔立ちの少女を連れた女性が出てきた。男は女性に「その少女が成人したら、わたしと結婚させてください。そのころにもう一度迎えに参ります」と言い、自分の帯をほどいて、少女の帯と交換した。少女はこの男の言葉を忘れず、帯を大切に持ち続けて、思いを募らせながら育った。だが男は、しばらくするとその少女のことを忘れてしまった。それから七、八年が過ぎた。男は再び大和への使いに向かい、途中、井手の里に立ち寄った。ふと井戸のそばを見ると、とても清らかで美しい女性が、次のような歌を歌いながら水をくんでいた。

「山城の井手の玉水手にむすび、頼みしかひもなき世なり。解きかくる井手の下帯行きめぐり、逢瀬(おうせ)うれしき玉川の水」。内舎人とは、天皇の護衛を務めた役人だった。

歌には、男がたわむれに交わした契りの言葉を忘れず、帯に思いを託して再会を願う少女の、切ない恋心が込められている。美しい女性へと成長した少女を目にした内舎人の男は、その歌を聞いて、かつて自らが交わした約束を思い出したに違いない。

物語には、伝承の結末は記されていない。まっすぐに男を思い続けた少女の恋が実を結んだかどうか。

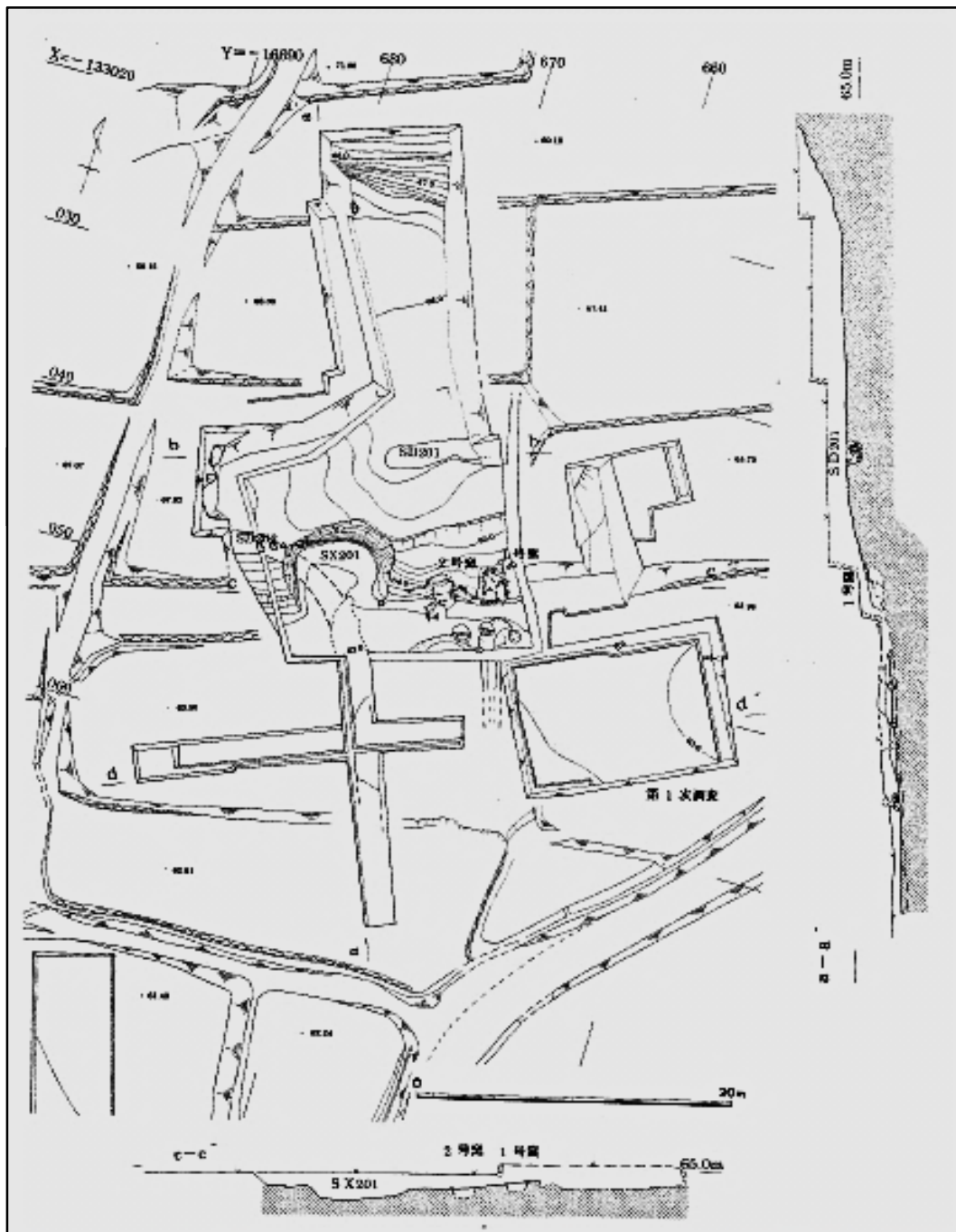
●石橋瓦窯跡 大安寺旧境内附(つけどり)の国史跡

大安寺の創建時の瓦が出土した「石橋瓦窯(がよう)跡」がこのほど、大安寺旧境内附(つけどり)の国史跡(2006)に指定された。

この付近一帯は聖武天皇を支えた最高権力者、橘諸兄の拠点で、瓦窯跡の西に氏寺である井手寺、玉川をはさんで南に別邸があったとされる。

これまでの調査で、3基の窯跡から大安寺の瓦が出土。周辺から恭仁京(木津川市加茂地区、740～744)で使われた軒平瓦が見つかった。恭仁京は諸兄が聖武天皇に上申して造営した都。この軒平瓦に関心が集まったが、ここで焼かれたことが断定できなかった。

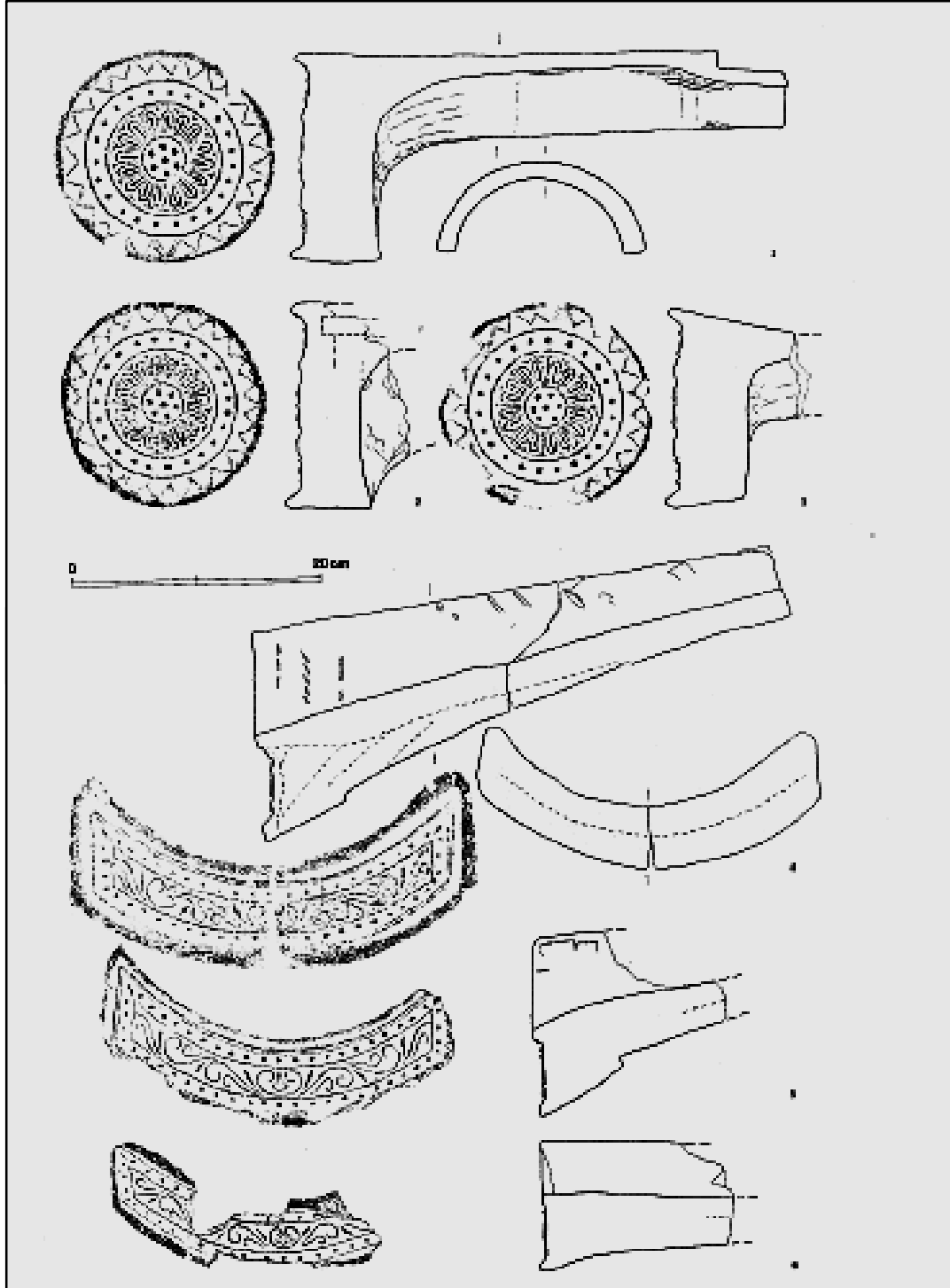
◎平成14年度石橋瓦窯跡調査遺構平面図



井手町教委『石橋瓦窯跡調査概報 平成14年度』
(7)

南に開口する分焰柱を持たない平窯が2基検出された。1号窯の焼成室は地山を0.5mほど掘り込む南北2.5m、東西2.6mの掘り方が確認される。二号窯は地山を0.7m掘り込み、南北約2.6m、東西約2.1mの掘り方を持つ。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・面戸瓦・塼が出土した。

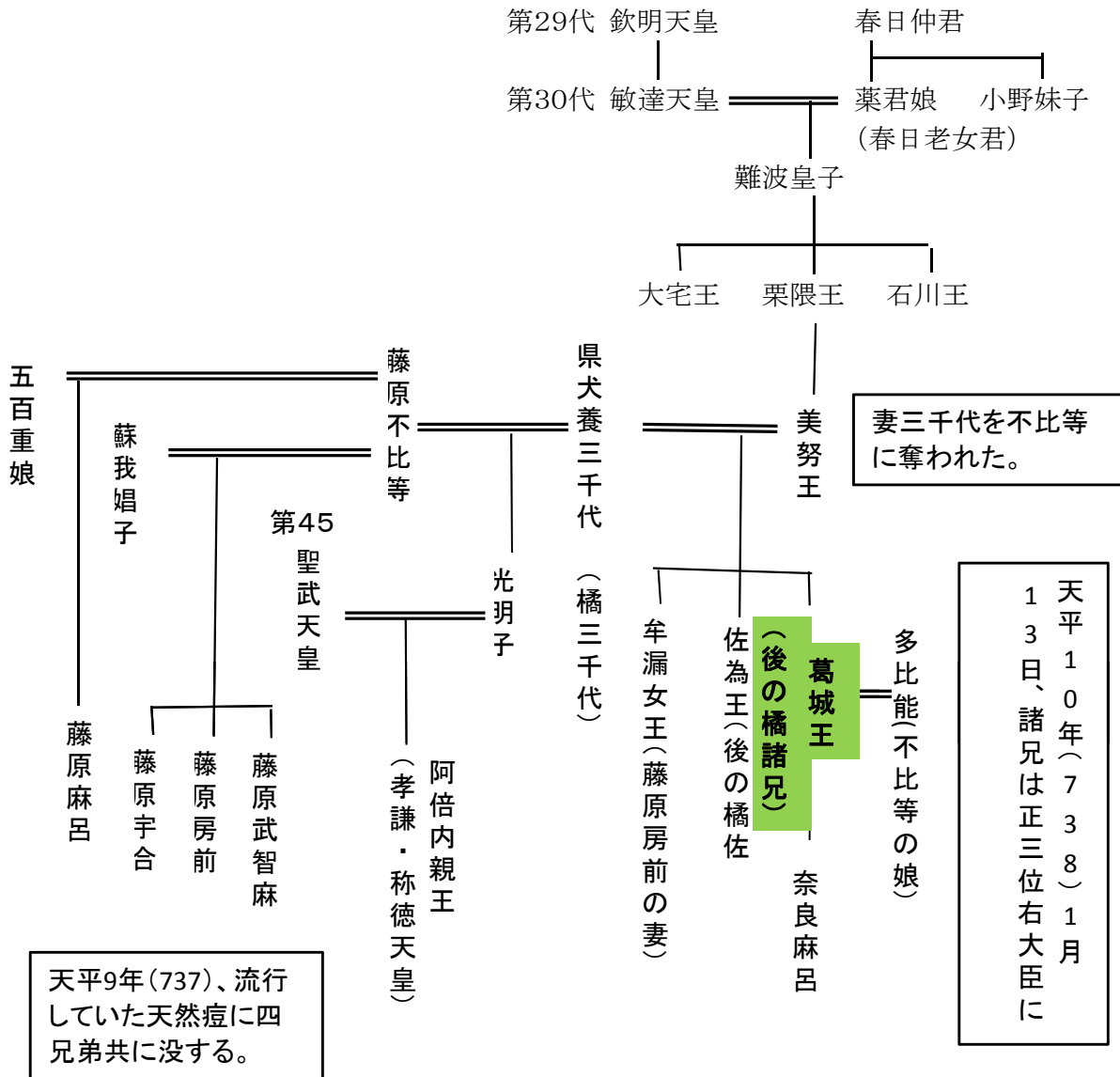
◎石橋瓦窯跡出土軒丸瓦



●橘諸兄供養塔

昭和49年(1974)奈良大学考古学研究かいにて調査がおこなわれ、井堤保勝会により、井手左大臣橘諸兄公墳の碑がたてられた。

奈良時代の貴族の最高権力者であった、橘諸兄(684~757)は、第30代敏達天皇の孫の玄孫(やしゃご)で栗隈王の孫で美努王の子。



橘諸兄は母と母の後の夫、藤原不比等に引き立てられ、不比等の女多比能(むすめたひの)を娶る。天平8年(736)臣籍に降り、母の姓橘宿禰を賜い諸兄と称した。

和銅3年(710)従五位下に叙し、729年班田使に任ぜられた。この年に薩妙観に贈った歌をはじめ和歌八首が『万葉集』に収められている。

731年参議に任じ、翌年従三位(さんみ)に昇叙。

737年左大臣藤原武智麻呂をはじめその三弟、中納言多治比郡守らの高官多数が疱瘡のため死ぬと、諸兄は同年大納言、翌年右大臣に任ぜられ、以来一の上(かみ、筆頭の公卿)として天平勝宝8年(756)致仕(官職を退いて引退)するまで18年間政権の首座にあった。藤原氏はしばらく政権から離れ振るわなかった。

740年秋、大宰少弐・藤原広嗣(ひろつぐ)が九州で大軍を率いて叛(はん)した。

その名目は僧玄昉(げんぼう)と吉備真備(まきび)を除くということにあるが、両名が諸兄政権のブレーンである点よりみて、実は諸兄排斥、藤原政権回復を意図したものと推定される。

乱中、天皇は10月末東国伊勢に行幸、そのまま平城に還らず、12月に山城国相楽郡恭仁宮に入り、これを皇都とした。

この地は諸兄の本貫に近く、遷都は諸兄の計画によるとされています。

741年国分寺、同尼寺建立が発願され詔が降った。また近江紫香楽宮の造営とそれへの頻繁な行幸がみられ、743年、天皇はこの地で大仏建立発願の詔を降した。しかし、翌年閏正月難波宮行幸があり、2月に難波を皇都とする詔が出たのは諸兄の政策によるのかもしれませんが。

天皇は紫香楽に行き、大仏造立を推進したが、反対多くて果たさず、ついに平城に還都した。

大仏は平城の東大寺で完成した。この間に諸兄の実権はしだいに衰え、藤原仲麻呂が実力を伸長し、諸兄、奈良麻呂父子との対立は深まった。孝謙天皇時代に光明皇太后と仲麻呂が政権を掌握、諸兄は失意にあり、755年飲酒の庭で礼なしと告訴され、太上天皇に許されたが致仕(官職を退いて引退)した。

天平宝字元年(757)正月6日没。

●井手火山灰層

井手丘陵および山城丘陵に分布する礫(石ころ)、砂、粘土を主とした地層は、約150万年～259万年前にできた大きな沼(湖)にたまった淡水成の堆積物で、新生代第三紀末の鮮新統～第四紀はじめの更新統と呼ばれる地層です。

池田俊夫(京都市青少年科学センター)は平成13年11月に、井手丘陵の橘諸兄公旧跡前の崖で「井手火山灰層」を発見しました。

このことによりこの井手丘陵の地質の広がりや重なり方、地質の構造や地層の堆積した年代など、また周りの各地質との比較、検討が行えるようになりました。そして井手丘陵の地質の全体像を明らかにすることもできるようになってきました。その上このことから南山城地域の過去150万年～250万年ほどの前の自然のようすを明らかにする手がかりが得られたと言っている。

地質時代の区分

| 開始年代 (年前) | 累代 | 代 | 紀 | 世 | 概要 | | |
|--------------|-----|-----|------|-----|---|---|--|
| 1万1700年 | 新生代 | 新生代 | 第四紀 | 完新世 | 人類の時代。更新世末に、大規模な絶滅。氷期と間氷期の繰り返し。大規模な氷河。日本海が拡がり、弓状の日本列島となる ^[24] 。 | | |
| 259万年 | | | | 更新世 | | | |
| 533万年 | | | 新第三紀 | 鮮新世 | パナマ地峡形成、ヒマラヤ山脈上昇、寒冷化、氷床発達。ヒトの祖先誕生。 | | |
| 2303万年 | | | | 中新世 | 生物相はより現代に近づく。アフリカがユーラシア大陸と繋がったことで両大陸間の拡散。インド大陸衝突。孤立している南アメリカとオーストラリアは、異なった動物相。日本海となる地溝帯が細長い海となり島(古日本列島)が誕生。 | | |
| 3390万年 | | | | 漸新世 | 気候変動による大規模な海退。哺乳類の進化・大型化。日本列島に当たる部分は大陸の一部、後に日本海となる地溝帯が拡大。 | | |
| 5580万年 | | | 古第三紀 | 始新世 | 現存哺乳類のほとんどの目(もく)が出現。 | | |
| 6550万年 | | | | 暁新世 | アフリカ、南アメリカ、南極大陸は分離。ヨーロッパと北アメリカはまだ陸続き。インドは巨大な島。絶滅した恐竜の後の哺乳類、魚類の放散進化。植物は、白亜紀に引き継ぎ被子植物が栄え、この時代にはほぼ現代的な様相 | | |
| 1億4550万年 | | | 中生代 | 中生代 | 白亜紀 | 2 | ジュラ紀から白亜紀の境目に大きな絶滅などはなく、白亜紀も長期にわたり温暖で湿潤な気候が続いた。恐竜の繁栄と絶滅。哺乳類の進化、真鳥類の出現。後期にかけて各大陸が完全に分かれ配置は異なるが現在の諸大陸の形になる。末期に小惑星の衝突によると想定されるK-T境界の大量絶滅。 |
| 1億9960万年 | | | | | ジュラ紀 | 3 | パンゲア大陸がローラシア大陸、ゴンドワナ大陸へ分かれ始め、後期にはゴンドワナ大陸も分裂を開始。絶滅を生き残った恐竜が栄えた。被子植物の出現。有袋類、始祖鳥出現。ジュラ紀は現在より高温多湿で、動物・植物ともに種類が増え、大型化していった。 |

●六角井戸

天平時代の左大臣・橘諸兄公は、井手左大臣とも呼ばれたように、ここ井手町に別荘を構え住まれていました。

この六角形に組まれた珍しい井戸は、諸兄公の館、玉井頓宮のなごりとして今に伝わるもので、諸兄公の井戸として語り継がれています。

玉井頓宮には、聖武天皇が平城宮から恭仁京へ遷都される旅の終わりに、仮宮として訪ねられた他、天平12年(740)、数度にわたって行幸されたと伝えられます。

聖武天皇を迎えた時に、橘諸兄公が詠まれた歌。

葎延(むぐらは)ふ 賤しき宿も 大君の 座(ま)さむと知らば 玉敷かましを
(雑草の茂るような家でもいらっしゃると知っていたなら玉を敷いておくのでしたのに)

お疲れ様でした。

●聖武天皇と橘諸兄の年表

| | | 主な出来事 | 聖武天皇 | 橘諸兄 |
|------|-----|--------------------------|---|----------------------|
| 天武13 | 684 | 八色の姓を制定 | | 誕生(18歳上) |
| 大宝元 | 701 | 大宝律令が完成 | 誕生(光明子も誕生) | |
| 慶雲4 | 707 | 元明天皇即位 | | |
| 和銅3 | 710 | 平城京へ遷都 | | 従五位下(27歳) |
| 和銅5 | 712 | 「古事記」を編纂 | | |
| 和銅6 | 713 | 諸国に「風土記」編纂が命じる | | |
| 和銅7 | 714 | | 皇太子となる | |
| 靈龜元 | 715 | 元正天皇へ譲位 | | |
| 靈龜2 | 716 | | 安宿媛(光明子)と結婚 | |
| 養老2 | 718 | 養老律令なる | | |
| 養老4 | 720 | 藤原不比等薨る。「日本書紀」を撰上 | | |
| 養老5 | 721 | 元明太上天皇崩御 | | 従五位上(38歳) |
| 養老7 | 723 | 三世一身の法 | | 正五位上(40歳) |
| 神龜元 | 724 | 元正天皇が譲位、陸奥に多賀城を築く | 天皇に即位 | 従四位下(41歳) |
| 神龜3 | 726 | | 興福寺東金堂建立(元正快癒) | |
| 神龜4 | 727 | 渤海より使者(以後滅亡まで34回くる) | 皇子(基王)誕生、皇太子に | |
| 神龜6 | 729 | 長屋王の変 | 藤原夫人(光明子)を皇后 | 正四位下・左大弁(46歳) |
| 天平2 | 730 | 薬師寺東塔、興福寺五重塔建立 | 光明皇后の発案で悲田院、施薬院設置 | 兼 催造司の監(かみ)(47歳) |
| 天平3 | 731 | 令外官として参議を新設 | | 参議(48歳) |
| 天平4 | 732 | | | 従三位(49歳) |
| 天平5 | 733 | 遣唐使の玄昉、吉備真備らが帰国 | 橘三千代(皇后の母)薨る | |
| 天平6 | 734 | | 興福寺西金堂建立(皇后の母の菩提) | |
| 天平7 | 735 | | | |
| 天平8 | 736 | | | 臣籍降下し、橘宿禰の姓氏を賜る(53歳) |
| 天平9 | 737 | 藤原4兄弟房前、麻呂、武智麻呂、宇合薨る(疫病) | | 従三位 大納言(54歳) |
| 天平10 | 738 | 橘諸兄、吉備真備、玄昉が重用される | | 正三位 右大臣(55歳) |
| 天平11 | 739 | | | 従二位(56歳) |
| 天平12 | 740 | 藤原広嗣の乱 | 難波宮、伊勢国へ行幸 伊勢より美濃国を経て山城玉井頓宮に 恭仁宮に行幸 | 正二位(57歳) |
| 天平13 | 741 | 国分寺・国分尼寺建立の詔 | 恭仁遷都を告げさせる | |
| 天平14 | 742 | 大宰府を廃止 | 山城国石原宮に行幸 信楽(紫香楽)宮に行幸 再度信楽(紫香楽)宮行幸 | |
| 天平15 | 743 | 聖田永年私財法 | 恭仁京に帰京 | 従一位 左大臣(60歳) |

| | | | | |
|----------------|-----|-------------------------------------|---|---------------|
| 天平15 | 743 | 壘田永年私財法 | 恭仁京に帰京 信楽(紫香楽)宮行幸 石原宮行幸 信楽(紫香楽)宮行幸 盧舎那仏造願の詔 信楽(紫香楽)宮にて、盧舎那の造仏 恭仁京へ戻る 恭仁京の造作を停止 | 従一位 左大臣 (60歳) |
| 天平16 | 744 | | 難波宮行幸 和泉宮行幸 河内国安曇江に行幸 信楽(紫香楽)宮に行幸 難波宮を皇都と定める 信楽(紫香楽)宮の山火事 | |
| 天平17 | 745 | 行基大僧正 | 信楽(紫香楽)宮に遷都 信楽(紫香楽)京の東西の山燃える 恭仁宮に遷る 平城京に行幸 難波宮行幸 | |
| 天平18 | 746 | | 金鐘寺(後の東大寺)に行幸 | 兼 大宰帥 (63歳) |
| 天平19 | 747 | | 盧舎那大仏像を鑄はじめ | |
| 天平20 | 748 | 元正太上天皇崩御 | | |
| 天平21 | 749 | 行基遷化(82歳) 陸奥国より黄金 孝謙天皇即位 | 東大寺に行幸 盧舎那大仏鑄造完了 | 正一位 (66歳) |
| 天平感宝元 天平勝宝元 | | | | |
| 天平勝宝2 | 750 | | 孝謙・聖武・光明皇太后、東大寺行幸 | 朝臣の姓を賜る (67歳) |
| 天平勝宝3 | 751 | 孝謙天皇東大寺行幸 現存最古の漢詩集「懷風藻」できる | 大仏殿造営 大仏の螺髪を鑄終わる | |
| 天平勝宝4 | 752 | 藤原仲麻呂が権勢を振るい始める | 大仏像に鍍金を開始 、開眼供養を行う | |
| 天平勝宝5 | 753 | 唐僧鑑真、大宰府に至る | | |
| 天平勝宝6 | 754 | 孝謙天皇東大寺に行幸 鑑真平城京に入る 太皇太后宮子、崩御 | | |
| 天平勝宝8 | 756 | | 難波の堀江に行幸 崩御(56歳) 光明皇太后、遺品を東大寺(正倉院)に施入 | 辞職 (73歳) |
| 天平宝字元 | 757 | 養老律令施行、橘奈良麻呂(諸兄の子)の変 藤原仲麻呂の絶頂期 | | 死去 (74歳) |
| 天平宝字2 | 758 | 仲麻呂(恵美押勝)という名を淳仁天皇からもらう | | |
| 天平宝字4 | 760 | 恵美押勝(藤原仲麻呂)を太師(太政大臣) | 光明皇太后崩御(60歳) | |